

BOOK REVIEW

芝棟 屋根の花園を訪ねて
亘理 俊次 著 八坂書房

「空中庭園」といえば、まず思い浮かべられるのはアッシリアの女王セミラミスのつくった「バビロンの架空園」が第一でしょう。それとも昨今賑やかな、マンションのベランダにつくられるコンテナガーデンが先でしょうか。ところがここに、おそらく有史以前から日本に存在し、今もおそらく人知れず山村のかたすみに残されてきた空中庭園があるのです。

「芝棟」とは茅葺きの民家の棟の部分に植物を植え込み、その根を張らせることによって棟を固める手法の謂で、ここに植えられたイチハツ、ユリ、イワヒバといった植物たちが、本の副題にあるように「屋根の花園」となって我々の目を楽しませてくれるのです。この本を手にするまで、茅葺き屋根に草の生えているのを見ても、それが意図的にそこに植えられているものだということを知らなかった私にとって、このもう一つの空中庭園は、アッシリアの女王の偉業をしのぐ大きな憧憬の的になりました。

かつて東日本一帯に見られた芝棟は、今では北関東と東北、北陸の一部の山村に残るにすぎず、日一日と衰退の一途をたどっていますが、冬は雪に閉ざされる山里で、春光を浴びた農家の屋根に、実際にそれを見つけた時の驚きは、我々の中に眠っている、ある古い風景の記憶を呼び覚まさせるにじゅうぶんでしょう。

ところで、庭をあらわすラテン語「ホルトゥス」は、宇宙の縮図という意味合いを併せもっているそうですが、この芝棟も、棟を固めるという実用と、花の美しさという実用をこえた生活美を映しだしているという点で、その屋根の下に営まれている生活と、周囲の自然のかかわりとの縮図でもあります。人によって設計され、垣に囲いこまれた庭園の花とも違い、また野辺に咲く花の趣とも違うこの庭園の花は、まさに遙かな昔から営まれてきた、農村の生活の縮図なのです。

植物と民俗、そして建築の本である本書は同時に、ある時代に日本の山村で営まれてきた一つの美学に関する本であり、庭園史の本でもあります。40余年にわたる著者の芝棟探訪は、そのままもう一つの庭園史の探訪であったといえるでしょう。

散歩の道すがら、傍らの家の庭先にイチハツが咲き、イワヒバが繁っているのを見つけたら、それはかつてその場所に芝棟の農家がたっており、年古りて取り毀される時に、棟から下ろされた名残なのかもしれません。

©ごろくと工房 1997年